

## 1. 目的

本事業では、アクティブラーニング（以下AL）を全ての学生に効果的に展開するための支援の在り方を、学年、習熟度、学習習慣の定着、学生の特性（人付き合いなど）などを考慮して詳細に検討する。そのために先輩学生または青年期を研究している大学院生をアシスタントにして、学習準備、班活動（共同学習）、振り返り（まとめ）それぞれの段階における学習課題と支援をまとめる。これらの取り組みから、青年期課題及びALへの適応度の観点から「主体的で深い学び」につながるための授業改善課題を臨臨床的アプローチから解明することを目的とした。

## 2. 方法

2017年度後期の井上担当科目のうち、B201教室使用の「こども論特殊講義B」（主に1年受講）、「生活科指導法」（2年小学校免許取得希望者受講）、「教育課程論」（3年小学校免許取得希望者受講）でアシスタントを各1名動員した。アシスタントにはワークシートチェック（事前学習、学習のまとめ）、班活動支援（机間指導）に担当講師と共同で取り組む。また、講義終了後には受講者の学習状況（ワークシート記述内容及び観察）を分析しデータベース化し、次回の指導の改善、重点的に指導すべき学生を特定する。また、後期講義終了時には、15回を通じての各学生の活動や学修状況を分析し、ALに向く学生、向かない学生への支援課題、班活動における課題を明らかにするための総括会議を行い、本事業のまとめを行った。

## 3. 成果

### （1）学生の科目横断のAL状況のデータベース化（半期分）

こども発達学科の小学校教員養成課程の1～3年の大半が履修する科目を対応教室でALにて展開し、その学習状況をアシスタントの協力にてデータベース化を行うことができた。実際には、毎回のワークシート（事前学習、授業時間中の学習、本時の振り返り）、アクティビティのうちグループワークの成果物及び個人発表資料とこれらに対するコメント集である。総括会議ではこれらのデータベースをもとに、ALにおける学生別、クラス別、科目別の成果と課題について分析を行うことができた。学生個別の学習プロセスの析出には、少なくとも前期分もデータをとるなど、時間をかける必要があるが、学年別のALの効果的活用の方法と課題については後述する学生の適性をもとに明らかにすることができた。

### （2）AL型授業適応度別学生の傾向（と対策）

（1）で得られたデータベースをもとにALへの適応状況の傾向を分析し、授業改善などの対策を試みた。井上が担当した科目のALでは多くをグループワークに頼っているため、グループワークの適応度による影響も考えられる。そのため、グループワークの適応度別の傾向についても別途分析を試みた。その結果、AL型授業の展開によって学生の各活動への主体性やのプロセスごとの困難（苦手感、忌避感）が浮き彫りになり、教師への学び（社会に出るための学び）における課題が詳細に「見える化」することが明らかになった。特にその傾向は大学教員が「まじめな学生」（授業時の指示通り行動できる）と評価する学生の傾向とは異なるものであり、従来型の授業では一部学生の真の学習課題を見落としてい

ることを示していた。

- ・「まじめな学生」でもALに向かないタイプ

「答えのない問い」に取り組むのが苦手であり、教師や他の学生の評価を過剰に気にする。中には、自分だけがうまく取り組めないのを「教員の説明不足」であると主張することもある。このタイプの学生はグループワークでは他の学生の意見を十分に聞き取る（受け止める）ことができない。また、自分でテキストを読んで自分の言葉でまとめるなど自己学習力に課題があることも明らかになった。

- ・グループの仕切り屋でもALに順応できないタイプ

教員や他の学生をよく聞いて次の行動（個人、グループ）につなげることが苦手である。具体的な指示を「伝言」することで自分のグループ内の優位性を保っている。特に1年に「言い出しっぺ」が仕切る傾向が強く、「ノリ」でグループワークを進めて学習がいまいち深まらないことがしばしば見られた。

- ・ALへの順応は経験度＝活動への参加（出席、授業態度）

各学年に共通する傾向として、表現（文章化）は不十分でも自分なりに事前学習に取り組み、授業時間内のワークにも集中し、他の学生の意見を十分に聞き取る（受け止める）という活動への参加がきちんとできている学生はALへの順応度が高かった。これらの学生に共通して言えるのは、意識差を感じる学生への関わりを面倒くさがらないことである。その結果、グループとしても学びあいの質を高める（意欲の低い学生を引き上げる）効果が見られた。

- ・ALで「救われる」学生：出席率の高い「まじめではない学生」

一方で、出席率は高くても事前学習など個別の課題、活動への意欲が低い学生にとってはグループワークなどALによって他の学生からヒントをもらったり、自分のつたない意見を聞いてもらって自信を持つなどすることによって、ワークシートを完成させることができていた。

### （3）AL型授業におけるアシスタント活用の効用

教員とは別の立場の「アシスタント」が授業内に入ることによる副次的な効果として二つの「アシスト」があった。

- ・学生をつぶやきをこまめに拾い上げる「アシスト」

（2）の分析を可能にしたのは、各授業でグループワークが停滞気味だった時期にアシスタントが机間指導や授業前後で耳にしたり、直接対話した結果得られた「率直な不満」であった。「まじめな学生」の一部からは活動に意欲的に取り組まないグループメンバーに対する不満があがり、「ふまじめな学生」の一部からはグループワークで自分が理解できないうちに置いていきぼりになる不満があがった。これらは1年から出る傾向があり、2、3年ではあまり聞かれなかった。

この声を参考に、1年に対しては「聞き合い」を徹底するような課題設定とアシスタントのサポートによってグループワークの再活性化を試みた。

- ・機器活用におけるアシスタントの「アシスト」

B201のような様々な機器を駆使してのALは機器の準備や調整などで教員が多く時間を割かれてしまう。アシスタントと机間指導と機器準備の同時進行（グループワーク、本時のまとめ記入時）によって、グループごとの機器設定の迅速化、学生にとっての「待ち」時間の縮小につながり、ALの充実を図ることができた。

## 4. 課題

### （1）B201の設備の活用

教卓機器及び電子黒板の接続方法の詳細な説明書がなく、アシスタントと試行錯誤で取り組んだため、前半では機器調整で学生に待ち時間をつくることもしばしばだった。そのため、今回の教訓をまとめた独自マニュアルを作成し、B201 教室に常置する予定である。(2018 年度前期)

また、電子黒板の接続のトラブルで必要な台数がそろわない(2~3台程度)ことがほとんどで、本来想定している8グループ分の整備を関係部局にお願いしたい。現在、学校教育では学習グループとして適切なのは4人単位という説が主流となっており、30名程度の受講者数でも8グループを形成することは珍しくない。

## (2) グループワークそのもののマンネリ化

学生がALになれるためには活動サイクルを変えないのが適切なのだが、そのことがグループワークそのもののマンネリ化とうむ事例がしばしば見られた。同様の理由で(初めに類似科目の成績を考慮した)班の入れ替えも行わなかった。そのことで、1年を中心に役割が固定したグループが散見された。これについては、本事業の対象外であるが1年小学校免許取得希望者必修の「生徒指導論」で、基礎ゼミ単位で班を構成しお互いの特性を理解し合ったうえで、班やメンバーの活動成果(発表やワークシート)に対し加点するしくみを試みた。このことにより、「まじめな学生」が「ふまじめな学生」に対してアドバイスや配慮が見られたので他の科目でも適用可能性を検討したい。

## (3) 学生の自主学習に向く(適度な水準の)教材選定

ALを展開する上で自己学習力、特にテキストの読解力は大きな課題として残された。テキスト講読を含めた事前学習をあらゆる科目で習慣化する(事実上の単位取得にする)ことで、2年生以上では最低限の力は身につく見通しがたつた。しかし、1年については、文章が読める、読めない以上に学校現場の様子を「想像する力」が極めて不十分である傾向がみられる。これに対し、漫画形式のテキストが増加するなど出版業界がすでに対応しており、今後は、学生(特に1年)の自主学習に適切な教材の選定に配慮したい。

## 5. 今後に向けて

### (1) AL 非対応教室における効果的なAL授業の探求

ALの本来の意味は学習者が主体的に学習を進めることであり、AL対応教室のみで展開できるものではないと報告者は考える。すでに、2018年度では講義形式の井上担当科目を全てALで本格展開する予定である。

### (2) 学生の科目横断のAL学習状況のデータベース化(1年分)に向けて

2018年度「FDを推進するための活動補助事業」にて実施予定である。これで、同一学生の1,2年次のALによる学習の蓄積などが明らかになる予定である。

### (3) 学会などへの成果発表

3.で紹介した成果については、得られたデータの詳細な検討を行ったうえで、北海道臨床教育学会、初年次教育学会などで発表し、学外者からの助言を得る機会としたい。

以上